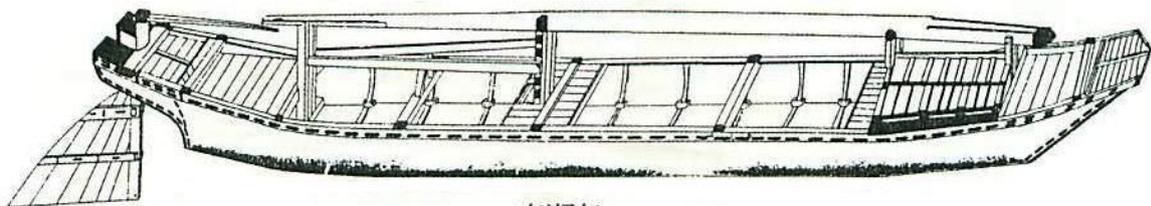


しゅう うん
舟 運

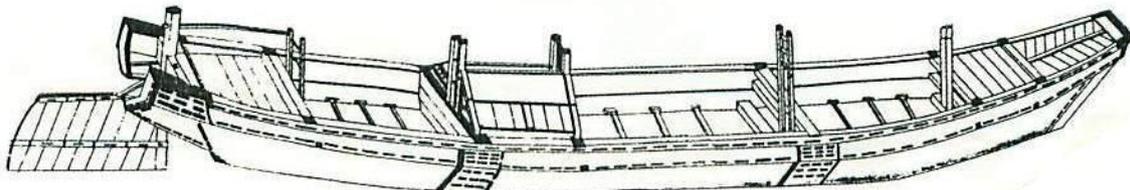
鉄道が発達するまで、物資輸送の主力は船でした。船が航行できるように、河川を整備し、河岸といわれる港町も沿岸各地につくられました。

利根川水系や荒川水系の水運では、高瀬船と平田船が主に利用されました。高瀬とは浅瀬のことで、高瀬船は船が浅瀬に乗り上げても方向転換がしやすいように船底を扁平にしたものです。平田船も底が平たく水中に没している部分が浅く、細長い船で、主に石材を運ぶのに用いていました。川の状態や運ぶ荷物によって大きさや形が違いますが、利根川水系では高瀬船が大量輸送の主役でした。このほかに、茶船といわれる小型船もありました。

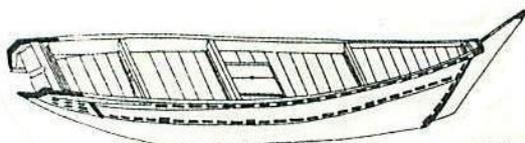
また船中に活魚を入れておく生簀を設けた「なま船」もありました。銚子浦で活魚を積み、利根川をさかのぼり、冬は陸路で江戸へ、夏は関宿から江戸川をくだって新川・小名木川を通り、江戸日本橋の魚河岸へ運ばれました。



高瀬船



ひらた船



茶船

(『荒川の舟運』あらかわ学会)

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)

活魚は鮮度が生命でしたから、できるかぎり短距離・短時間のルートが選ばれました。

河川では河岸が運輸の拠点になっていました。河岸を通る荷物の大半は各地から集まる年貢米で、これを廻米かいまいといいました。このほか、酒・味噌・醤油しょうゆ、その他の農産物や海産物などが運ばれています。

河岸からは、荷物ばかりでなく人も乗りました。江戸川には、高瀬舟を屋形作りのりあいよぶねに改造した「乗合夜船」とよばれる旅客専用船も行き交っており、中川と小名木川の交差する場所に置かれていた中川番所は、これら通船をあらためる関所でした。

また新川では、「行徳船ぎょうとくぶね」とよばれる定期船かんえいが寛永9年(1632)に設けられました。これは江戸小網町こあみちょうの行徳河岸から本行徳河岸(市川市)にいたる航路を、幕府から特別な許可を得て運航していた客船で、「長渡船ながとせん」や「番船ばんせん」ともよばれました。房総におもむく旅行者や役人の往来に利用され、特に成田山の参詣が盛んになった江戸時代の中頃から、多くの旅人でにぎわったようです。

市川市本行徳の江戸川畔はんには、常夜燈じょうやとうが一基残っており、ここはかつての河岸で、旅籠はたごや飲食店のならば宿場だったところです。

平成17年(2005)10月、荒川と旧中川を結ぶ場所に「荒川ロックゲート」

こうもん(閘門)が完成しました。国土交通省が建設した災害対策用の施設です。この完成で江東デルタ地帯こうとうの内河川に船の就航が確保され、災害時に人や物資の輸送が可能となりました。この地点はかつて「塩の道」とよばれ、江戸川区の新川と江東区の小名木川を結ぶ舟運ようろの要路でもありました。



常夜燈(市川市本行徳)

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)